

「良い子の落とし穴」が教えてくれるもの その2

———子育ては親育て—————

園長 高杉 美稚子

今号も、平成19年、5月に開催しました私の第1回「子育て教育心理講座」の中からお伝えします。既に子育て講座でお聞きの保護者の方は復習のつもりで読んで下さると嬉しいです。

子育てをしている間、私たちは非意識下なのですが

- ① に「真に子ども自身にとってよい子」であってほしい
- ② に「他者からみてよい子」に育ててほしい
- ③ に「親である自分にとってよい子」に育ててほしい

といういずれかの思いが根底にあるのです。

この枠組みを提示されている大河原美以先生の考え方を参考にして幼稚園児を振り返って、考えてみたいと思います。

私たちが子育てをしているときに、よい子に育ててほしいと願うのは親なら誰しもです。みんなわが子にはよい子に育ててほしい、幸せになってほしいと願わない親はいません。

最近は幼児虐待など、この規範すら危ぶまれてきていることは残念なことです。・・・私はどの親も自分の心や内面の問題が処理できずに、またはなぜそうしてしまうのか、自の心の問題に気づいていないで、起こしてしまった悲しい事件で、どの親の心にも、わが子が幸せになってほしいという気持ちはあると信じていたいですね。

ただ、そのあらわし方、行動が間違っている。けれど、そのひとの存在自体は否定したくない、きっとわが子を愛していたと感じてくれる日が来るに違いないと願っています。

すべての親はどんな事があっても、心の奥底では、子どもを愛していると私は感じるのです。

でも、愛するがゆえにわが子の幸せを祈る、幸せを祈るゆえに、子どもに無理をさせていないか、負担をかけすぎていないかに気を配る必要があります。

だからこそ、私たちの行動、表わし方が大切になってくると思うのです。愛しているからこそ、その思いが過ぎてしまうことがある。では私たちの子育てはどうすればいいのでしょうか。

こんなに親が愛していても、子どもは、「なぜ、愛されていない」と感じるようになるのか。こんなに親が思っているのに、「なぜ、親がうざい」と嫌がられることがあるのか。

子どもの幸せを願っているのに「お前のせいで、こんなに育てしまった」と親を恨むようになるのか、そのことを、視点を変えて考えてみるのが大切になってきます。

青年期の子ども達の姿を振りかえることで、今、まだ、幼い子どもの子育てに大切なこと、転ばぬ先の杖になるようなこと、教えてくれるものがたくさんあるように思います。

幼稚園の間も心配なことはたくさんあるかもしれませんが、深い問題は、やはり、青年期に顕著に現れてくるのです。幼児期に親の目を意識したみせかけのよい子では、いつかどこかで、爆発してしまうことになりかねません。だからこそ、今、幼稚園児をもっていらっしゃる保護者の方に知っておいて頂きたいのです。子育ての大切さを、そして同時に親が必死になりすぎず、リラックスして子育てをすることの大切さを。

15歳の中学卒業を迎えたところに、人生の節目、ひとつの曲がり角がやってくるといわれています。そのときに、「ありがとう」の感謝の言葉とともに花束が届くのか、自分の子育てを後悔することになるのか、結果は後でしかわからないのです。だからこそ、これからご一緒に考えて行きましょう。10年後、20年後を見通して、今できることを、できる範囲でいいので、やっておきましょう。心に留めておきましょう。

さて最初の枠組みに戻ります。

1、「真に子ども自身にとってよい子であってほしい」はある意味当然のことですね。これが私たちが目指す子育てです。このことについては最後の項で述べましょう。子育ての基本、そして、吉塚幼稚園が目指す教育ですから。でもこれが子育てにおいて、理解できていそうで理解されていないのです。なぜでしょうか、それは子育てにおいて次の二つの枠組みを持ってしまう場合があるからです。

残念ながら「真に子ども自身にとってよい子であってほしい」と「他者からみてよい子に育ててほしい」「親である自分にとってよい子に育ててほしい」は同列ではなく、相反するものだからです。

2、「他者からみてよい子」に育ててほしい

このように感じている親はつい、「過干渉」「過期待」（子どもが望んでいないのに、過剰に世話をし、心配し、期待をかけること）の子育てをしてしまいがちです。

（「過干渉」「過期待」については、詳しくは先月号の巻頭言をご覧ください。）

他者から見てよい子に育ててほしいと願って子育てをする時、つい、子どもに過剰にしつづきを厳しくしてしまいがちです。しかも、そのとき親がこう思うからというしつけ方ではなく、「人から笑われないように」とか「人がどう思うの?」と押し付けの教育をしてしまうことになりかねません。電車の中で、暴れていたりするときに「運転士さんにしかられるからやめなさい」とか「そんなことしていたらおばあちゃんにしかられるよ」と親の責任ではなく他者の権威を借りて、しかったりもしてしまいます。

そうやって、人の目を気にして、エネルギーを溜め込んでいい子を演じいい子でありすぎると、思春期になって、心の問題が生じてくることは最近ではよく知られるようになってきました。

「子どもがどうしたいか」「子どもがどう感じているか」ではなく、その感情を押し殺して大人にあわせているところが後々、問題になってくるのです。だから先月にも書きましたが、吉塚幼稚園の「心の教育」が大切になってくるのですが……。

さらに親の責任で、しかられたのならまだ、親の目だけですが、そこに他者を持ち出されると常に見えない世間におびえて行動するようになりかねません。

いつも他人が、どう思うか、他人がどう自分を評価するかという中にいると、人間はリラックスが出来ず、いつも、その影におびえていなければなりません。問題は、子どもにこのようなしつけをする時、親は自分自身がそのような育ちをし、自分自身が見えない世間におびえていることに気づくことが大切です。

親自身がそのように感じていると、その自分の内面の不安を隠すために、子どもの世話を余計に焼くということがおきます。過剰に世話をすることや、子育てに過敏になることによって、自分の不安を解消しようとしてしまうのです。人は「自分の思いは人もそう思っている」と感じがちです。これは心理学用語で言う「投影」と呼ばれるものですが、自分が不安を持っていると、その不安が子どもに投影されて、子どもも不安に違いないと思うことを意味します。そして、「不安でしょ。不安でしょ」という意味の言葉かけをするので、子どもも不安だと思い込むようになるのです。心理学では、「自分の思うように自分はなる」といわれているのもこの為です。私は、不安で不幸せになるに違いないといい続けているとそのようになるのです。なぜかと言うと、自分がそう決めているわけですから、小さな幸せがあってもそれを幸せとは感じないで、不平不満を言ってさらに不幸せになるということを自分がしてしまうからです。「ほら、不幸せでしょ。」とそのことの証明をしていくのです。

そして、「自分が自分のままでいい」と思えない、その満たされない思いを子どもにぶつけてしまうことになります。結果として過剰に世話をされたり、先に先に、体験を摘まれた子どもは「支持待ち症候群」になったり、小さな挫折を体験しないまま、大きな挫折にぶち当たるので、傷つきやすく、壊れやすくなります。過剰に期待されることも、子どもにとっては、「期待通りになったら愛してあげる」「期待通りにならない時は・・・」という親の心の裏のメッセージが伝わり、子どもは頑張りすぎてしまうか、きれてしまうことになるのです。そして、周りにいる大人は、もっと心配してさらに「過干渉」「過期待」が増すという悪循環に陥ってしまうのです。

親の不安を子育てで解消しては子どもがかわいそうです。でも知らず知らずのうちにこのことをしてしまっている可能性があります。また、自分の不安が引っ張り出され、強くしかってしまう時、親自身がよい子育てをしている、よい親であると周りから認められたい、自分の評価にしたい。「だめな親」であると思われたくない恐れでしていないかということにも気づいてほしいのです。

皆と同じように、よい子に見えるようにとあせってしまう心は、自分がしつけられてきた子育てであることが多いことは事実です。自分自身も幼いころからずっと他者から見てよい子であろうと頑張ってきた結果です。子育てが時に辛いのは、そうやって自分自身と子どもの頃の自分の育てられ方の記憶を呼び覚まされるからです。往々にして私達は親に育てられたように子育てをしてしまいがちです。もちろん「反面教師」ということもあるでしょうが、母親に言われたこと、されたことはしたくないと思いつつ、「ハッと」気づくと同じような事を言ってしまったと、自己嫌悪になる経験をされた方もいることでしょう。だから、「子育ては自分の育て」なのです。

子どもは親の鏡なのです。自分を写す鏡なのです。だから子育ては、自分と向き合うことから始まってしまうのです。でもいいのです。気づかなければ、変わりようはありませんから。すべて大丈夫です。そのような自分であることに気づいたところから出発です。3、「親である自分にとってよい子」に育てほしい。

次に「親である自分にとってよい子」を望むとき親は、子どもの嫌がる姿を見たくなくてしきれなくなります。先月号の5つの過ぎたるかかわりで言うところの「過許可」「過放任」の子育てです。時に「過保護」も入ります。

子どもの機嫌がよかったり、いい子の顔を見せてくれれば、親も安定していられるのですが、子どもがぐずったり、悪いことをしたり、不満を持ったりすると、自分の不安が喚起されます。非意識下ですが、その不安を受け止められない時、子どもを適切にしかれない、そして、子どものしつけ、規範が出来なくなります。そしてこの親の不安は、子ども以外の周りの人に向けられることになります。子どもの為にこんなにしている、周りに対して苦情や不満を言って、相手が悪いあなたは悪くないと守ってあげているという姿勢を示し、子どもと一見、民主的な関係を保つことで自分の不安や葛藤を見ないようにします。

いつもニコニコして親を癒す役割をになうことによって、または、反対に辛いことばかりを言って親の不安を喚起し、子育ての仕事を作ることによって子どもは愛されるという立場をますます会得していかざるを得なくなります。

子どもはどのようにすれば、親に愛されるかを、学び、そのように振舞っていきます。子どもは本来、不快な気持ちをぶつけて、泣き、すね、ぐずるものです。でもその感情を出すと親の不安が喚起されることを肌で感じ取った子どもは、その感情を抑えて出さないように、愛されるように努力せざるを得ません。いつもニコニコし続けていい子でいなくてはならないのです。またはいつも不平不満を言うことで親の仕事を作ることで、自分を保っていなければいけません。こんな子はひょっとするとにっこり笑って大丈夫といいつつ一人苦しんで、リストカットにいたるのかもしれませんが。結果として、不平不満を言うことで、自分自身の心を不健康にしていくかもしれません。

本当は自分で解決能力があるのに、親が先に経験を摘み取ることは、本当に自分がやれば出来ると信じてもらえていない、愛されていないと子どもは感じて生きます。

このことは2と同様親の育ちのプロセスと関係してきます。根本的に親の不安を埋めてくれ、理想を満たしている間はいいいのですが、子どもが親より、先に真の自立を遂げた時は、親のほうで精神的に見捨てられたと、また不安になるのです。だからますます、口では子どもの自立を願いながら、子どもが本当の自立が出来ないように「過保護、過干渉、過期待、過放任、過許可」という「五つの過ぎたるかかわり」をしてしまうことになるのです。だから、知らないうちに、親の問題を子育てに反映してしまっている、親の不安を埋め合わせすることで、子育てをしていると、子どもは、決して自分にとっていい子には育たないのです。だから、親の不安を子育てで解消してはならないのです。

では、子どもにとって子ども自身がいい子でいるために親はどのような子育てをしたらいいか、親の姿はどうあったらいいかということです。子育ては、親自身が、「自分を愛する、自分自身を受容する」と言う過程にほかなりません。紙面がなくなってきました、続きは次号です。